

# Rainbow letter

2018.7 No.16

日本周産期メンタルヘルス学会・ニュースレター

## 日本精神神経学会シンポジウム報告

第114回日本精神神経学会学術総会が2018年6月 21日~23日に神戸にて開催されました(会長:大 阪医科大学神経精神医学教室·米田博教授)。周産 期メンタルヘルス関連としては「産後精神障害の適 切な理解と対応を考える」のテーマでのシンポジウ ムが開催されました。朝8時半からのシンポジウム にもかかわらず、シンポジウム開始時に会場はほぼ 満席であり、開始10分後には立ち見が出るほどの 盛況ぶりでした。聴講して学びになったことを紹介 させていただきます。岡野禎治理事長からは「産後 精神疾患を考える:産後うつ病と産褥精神病の特徴 とは何か」の演題のもと、産後うつ病の一定の割合



シンポジウム終了後に記念撮影。皆さん、充実感あふれる表情です。 ~ 座長の渡邉博幸理事と竹内崇理事と共に

が双極性障害に進展すること、産褥精神病と自己免疫性疾患の関連が示されていることなどをご紹介いただきました。 北村俊則顧問からは「親の子に対するボンディング障害とは何か:精神障害のカテゴリーとして捉えられるか」の演 題にて、ボンディング障害の特徴として「愛情の欠如」と「怒りと拒絶」があること、「ボンディング障害は精神疾 患のカテゴリーである」というメッセージが届けられました。田口寿子理事からは「産後うつ病と嬰児殺:症候学的 特徴と防止対策について」の演題にて、嬰児殺という悲しい結果になってしまった事例解析から、強い育児不安が影 響していること、産後うつに対する介入の重要性が示されました。鈴木利人理事からは「産後精神障害の薬物療法: 授乳と両立できるか」の演題のもと、不眠と涙を流すことは産後うつの警告症状であるので過小評価しないこと、日 本では添付文書の影響で向精神薬内服中の授乳は避けられる傾向にあるが、国際的には母乳を与えることのメリット の方が大きいと考えられていること、向精神薬の相対的乳児薬物投与量(RID)は10%未満であり影響は少ないが、 傾眠などの副作用が出る可能性はゼロではないため、慎重に見ていくことが大事であるとのメッセージが伝えられま した。最後に小泉典章先生から「行政との連携による産後うつ病対策:行政と連携することの重要性とは何か」の演 題にて長野市においての取り組みが紹介され、早期支援が虐待防止に寄与できる可能性を示されました。個々の演題 が非常に勉強になると同時に、総合討論でも活発な議論がかわされ、周産期メンタルヘルスへの高い関心を感じるこ とができました。 (評議員/根本清貴/筑波大学医学医療系精神医学准教授)

## 第15回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会 いま、あらためて「寄り添う」を考える

時:2018年10月27日(土)・28日(日) 所:神戸女子大学ポートアイランドキャンパス

大会長:玉木敦子(神戸女子大学看護学部看護学科教授)

★ 一般演題募集を7月31日(火)まで延長しました。



#### 研修会開催案内「**周産期メンタルヘルス研修会2018**」

日 時:2018年9月23日(日) 9:00~17:30

所: 北里大学薬学部1号館 白金キャンパス (〒108-8641東京都港区白金5-9-1)

対 象:助産師、看護師、保健師、臨床心理士、医師など

参加費:午前3,000円、午後3,000円、午前午後(特別価格・正会員のみ)5,000円

内容:午前は周産期メンタルヘルスの基礎知識、ガイドライン、マニュアル、コンセンサスガイドの活用方法を

学びます。午後は午前の知識をもとに具体的な支援を検討するワークショップを行います。

★ 定員がございますので、お早めにお申し込みください!

### ((投稿記事募集!))

会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。 詳しくは学会Webサイト(http://pmh.jp/index.html、QRコード(→)) または、学会事務局 (mental-3@hac.mie-u.ac.jp) まで。



